

<書評>

「松戸市に夜間中学校をつくる市民の会」 著
『新たな出発(たびだち)の今(とき) 松戸自主夜間中学校の30年』
桐書房 2015年12月

井上大樹(札幌学院大学)

本書は、北海道で自主夜間中学、公立夜間中学設置運動に関わっている評者からは先輩にあたる「松戸市に夜間中学校をつくる市民の会」(以下「市民の会」)の労苦だけでなく、自主夜間中学ならではの教育内容も詳細に記してある点でこれまでの「夜間中学本」にはない特色がみられる。

「第1章 学びの場を求めて」では、「市民の会」が運営する松戸自主夜間中学(以下、自主夜中)に來られた様々な学習者の背景や学びの足跡を義務教育未了の高齢者、不登校経験者、外国籍の人々、障がいのある人々について詳細に紹介されている。学習者によっては行きつ戻りつという方もいるものの、少なくとも自主夜中がどの方々にとってもかけがえのない居場所であり、人生を大きく変える場所になっていることがよくわかる。また、多くの学習者の作文については「第3章 出会い、ふれあい、学びあい」でじっくり読むことができる。これらを読むにつけ、自主夜中の懐の深さがうかがえる。p. 57に「市民の会」による5つの原則が記載されており、スタッフの人柄だけではなくきちんとした方針を堅持してつくられた「学風」であることがよくわかる。

全国各地に展開されている自主夜間中学では個別学習の形態をとることも多いせいか、学習内容(授業内容)やカリキュラムについてまとまった文献が希少である。しかし、本書では「第2章 自主夜中ってこんなところ」には、一斉授業のみならず、個別授業についても事例紹介としてその試行錯誤が赤裸々に記されている。行事や特別授業、さらには学習者(生徒さん)が参加しての運営の様子についても紹介されている。ここに学習者一人ひとりの声によりそって学習活動が展開されている「松戸スタイル」と言うべき、自主夜中の一つの形がはっきりと読者に伝わるのである。

「第4章 公立夜間中学の開設を粘り強く求めて」からは、「市民の会」が学習者の思いを学習活動にとどめずに行政を動かす運動の要に据えてきたことがよくわかる。公立夜間中学の開設について具体的な要求を根拠に市教委、市議会などに働きかけ続ける「市民の会」に対して相手がどのような姿勢であったか、その足跡が手に取るように臨場感をもって読者に伝わるであろう。「第5章 全国から寄せられたエール」からは、松戸市以外の方々からの応援が多士済々であり、この運動の必要性が実感できる。

自主夜間中学、公立夜間中学設置運動が30年を超える団体が増え、このような文献が団体のある地域にとっても、全国の夜間中学にとっても重要な意義をもつ。夜間中学に縁のなかった地域の新しい実践にむすびつく「橋渡し」を学会としても検討していただきたい。